

〔論 文〕

昭和初期の盆栽趣味の諸相

—『趣味大観』(1935) にみられる自然栽培趣味の記述から—

早 川 陽

The Development of Bonsai as a Hobby in Early Showa Japan: Examining Descriptions of Natural Planting as a Hobby in the Book *Shumi Taikan* (1935)

Yo HAYAKAWA

This paper explores descriptions of natural planting as a hobby in the book, *Shumi Taikan* published in 1935, focusing on bonsai. The study explains how the number of cultural pundits who enjoyed hobbies and built relationships with each other increased in early Showa Japan.

Chapter 1 describes the community and context surrounding bonsai and explains its importance. Earlier studies on the history of bonsai are also examined. Chapter 2 summarizes hobbies related to natural planting that are described in *Shumi Taikan*. Chapter 3 classifies bonsai pundits by experience and describes their characteristics. Chapter 4 summarizes the construction of hobby organizations by area and name of organization and also appraises a large-scale exhibition held at Hibiya Park.

This study verifies that an increasing number of publications by bonsai pundits and of botanical centers on natural planting as a hobby in early Showa Japan resulted in widespread recognition of bonsai. Bonsai was initially recognized as a new type of culture that was considered harmonious with *sencha* and suitable as ornaments for *tokonoma*. Thereafter, hobby groups were systematically formed and small- to large-scale exhibitions were held. Bonsai was favorably received by the public, leading to an increase in exhibitions. Bonsai developed into an art form from the time it came to be considered unique to Japan, rather than as part of Asian culture in general.

Key words: Japan in the early Showa period (昭和初期日本), bonsai hobby (盆栽趣味), enthusiast (愛好者), art culture (美術文化), exhibition (陳列会)

1 はじめに

1-1 盆栽をめぐる社会状況と再考の必要性

本論は、1935 (昭和10) 年発行の鶴橋泰二 (編) 『趣味大観』「現代趣味家総覧」にみられる自然栽培 (縮景¹) 趣味の記述、特に盆栽趣味について考察しながら、昭和初期の趣味家²の間で文化愛好者の関係性がどのように成立したのかを明らかにするものである。そして、大正末期から昭和初期にかけて、自然栽培 (縮景) 趣味が需要層を形成し、美術 (展

覧会) の芽生えに繋がった状況も合わせて考察する。

盆栽研究で知られる岩佐亮二によると、「盆栽」は「鉢やその他の器物に樹や草を植え、時に石を添えるなどして全体を整え、それが対者に自然の景観から受ける豪荘・可憐・繊細・佳麗などの感興を想起させるもの³」であり、「景観に接して感ずる美的な心象を生育可能な状態で器物の中に表現するという創作活動、すなわち芸術性の有無こそ、「盆栽」と「鉢植」との分岐点である⁴」という。

同研究によれば、盆栽概念の定着は「明治20年

頃（1890 頃）社会の一部に発端し、先達の並々ならぬ啓発活動により、約 40 年間に要して、大正末年頃（1925 頃）に至り、ようやく社会通念に昇華した。したがって、最も厳密狭義に「盆栽」を定義づければ、その源流は明治 20 年頃で行き止まる⁵という。このことを踏まえ、本論では盆栽概念の定着をみた、大正末期から昭和初期の状況を確認することとする。

筆者は日本画、美術教育の範囲を研究対象とする。今日、図画工作科や美術科の学習指導要領には「生活文化」「美術文化」の文言が入り、美術の教科書にも風呂敷や和菓子、そして盆栽が生活文化の例として掲載されている。近代化の過程で、文人趣味が流行し、「大衆性（俗）」「東洋的であること（亜）」ゆえに一旦“芸術教育”から切り離された生活（美術）文化にかかわる内容が、現代の学校教育に取り込まれることになった。学校外教育に位置付けられていた生活（美術）文化の領域が今改めて着目されていると考えることができる。例えば歌川（2019）は、近代の「音楽のたしなみ」を研究する過程で、この研究領域が死角となっていることを指摘し、「教育史は近代公教育の成立に、芸能史は前近代の展開に、芸術史はプロの手による西洋文化の受容に、その関心を寄せがちである⁶」とした。近代の趣味、生活（美術）文化は、学校外の教習、趣味のネットワーク等の研究によって明らかにできると考える。

本論は『趣味大観』『趣味道に関する文献（第 1 部）』における趣味の構成を確認した上で、中心となる「現代趣味家総覧（第 2 部）」に紹介された記載内容を参考に、「造園」「盆栽」「盆石」、近接領域として「園芸」「山草」「植木」「石の蒐集」「森林写真蒐集」「自然」「野菜栽培」に着目し、昭和初期における自然栽培（縮景）趣味の状況を捉え、文人趣味の流行から美術への過渡期の価値観の移り変わりを考察する。

1-2 盆栽史をめぐる先行研究

明治、大正、昭和初期の盆栽研究に関しては、当時発行された著書、盆栽専門・農業雑誌、同好会会誌、通信教育資料、博覧会・陳列会・品評会・展覧会等の記録、売立目録、通信販売目録、記念帖など

から確認することができる。明治初期は幕末期の書物が継続的に読まれたが、『法然上人絵伝』『春日権現験記』『徒然草』に、盆栽に繋がる鑑賞がなされている表現があることを指摘した横井時冬「盆栽考」1892（明治 25）年（『日本園芸会雑誌』36 号、のち『芸窓棟載』（1904 明治書院）収載）、盆栽は美術であるとして開いた美術盆栽大会の記録である田口松旭『美術盆栽図』1892（明治 25）年など、歴史的な位置づけを確認し、飾り方の新解釈、栽培方法の工夫、流行樹種の紹介、美学的な考察を加えた内容まで含む、新しい試みの著書⁷が出版された。

大正期になると新聞・出版界出身の編集者や主筆、昭和期になると趣味家自身、そして盆栽園主による出版が多くなる。本論で確認した昭和初期資料には、『盆栽』を主宰した小林憲雄や『東洋園芸界』主筆の金井紫雲、趣味家、波多野承五郎『古溪隨筆』（1926 実業之日本社）、住田正雄『盆栽道』（1931 博文館）、澤田牛麿（編）『盆栽芸術』（1934 成美堂書店）、能勢萬『樹石』（1943 大雅堂）などがある。

戦後、盆栽趣味は大衆文化として広がり、技術書の需要が高まったが、盆栽誌の別号として、往時（戦前）を振り返る盆栽園主の座談会や、盆栽通史をまとめた論考が発表されている。通史には明治から昭和期に発行された盆栽雑誌『東洋園芸界』『華』『盆栽雅報』『盆栽』などの記事を再掲載し、論拠とするものが多い。

学術的には 1988 年から 2005 年まで、日本大学生物資源科学部を本部とする盆栽学会があった。冒頭に引用の岩佐亮二『盆栽文化史』（1976 八坂書房）、副会長を務めた丸島秀夫による『日本盆栽盆石史考』（1982 講談社）、『日本愛石史』（1992 石乃美社）など、盆栽や水石の歴史的変遷のとりまとめを行った。そして、2010（平成 22）年に公立の「さいたま市大宮盆栽美術館」が設置されたことで、盆栽と美術を巡る動き⁸も盛んで、各企画を通したインバウンド需要・輸出増もあり、世間の盆栽への関心は続いている。

拙著『藝術と環境のねじれ—日本画の景色観としての盆景性』（2013 清水弘文堂書房）で日本画の景色制作と美術文化の考察を進め、絵に描かれた日本画の景色に着目し、近代に山水画と風景画のねじれと

しての盆景（盆栽）性が出現したことを指摘した。また盆景（盆栽）文化と学校教育や庭園、植木鉢等の、文化的関係性について考察している。

2 『趣味大観』

2-1 『趣味大観』『現代趣味家総覧』

『趣味大観』（趣味の人社）は鶴橋泰二によって1935（昭和10）年に編集・発行されたものである。同書は人名録や人士録のひとつで、「趣味」を基軸にして、全国的に集めた人物の情報を配列しまとめている。氏名のほかに、雅号・代表的趣味・爵位・住所・電話番号・出生・経歴・職業・所属・家族構成などの基本情報を網羅している。1322頁、定価は35円であり、当時としては高額で大がかりな出版であった。被掲載者は複数の趣味をあげ、主なものは取材に基づいて、始めた経緯や影響を受けた人物、所属会、逸話なども褒め称える論調で紹介され、同書の記述には愛好家を示す「アマチュア」の語も多く使用される。いずれも人士であるならば、高尚な趣味に参加するべきことを是とした上で、どのような趣味の視点を持つのか、社会参加の度合いや成果の有無も含めた内容となっている。本書によると、取材対象者を選定する協力者9名、編集には社の14名の氏名が記録され、調査編集発行に2年の月日を要したとある。鶴橋は東京日日通信社編として『現代音楽大観』（1927日本名鑑協会）を先に刊行し⁹、その続編として本書を企画している。

趣味について鶴橋は1935（昭和10）年12月付で、「趣味とは何ぞや。趣味とは、一個の人間が事物の『趣』を味ふ力である。趣味は飽くまで主観的であり、變化性を有してゐる。趣味は良心に相似て一種の心身の活動であるから、能力ではない。而して趣味の含有する要素は直観・判断・実行の三が共在してゐるのである。実行を省いても趣味の目的を把握し得ることは言を俟つまでもない¹⁰」と含意を示した。

内容は3部構成で、最初にまず「趣味道に関する文献（第1部）」、目次に沿って第1編「音楽」に関するもの168頁分、第2編「美術」に関するもの46頁分、第3編「教養」に関するもの80頁分、第4編

「スポーツ」に関するもの73頁分、第5編「栽培飼育」に関するもの40頁分、第6編「蒐集」に関するもの45頁分、合わせて452頁を趣味の説明に使っている。次に「現代趣味家総覧（第2部）」は、新たに目次を立て、本書の中心部分682頁分を使用して幕末期から大正期生まれの1,135名の趣味を記載する。そして「現代代表令嬢総覧（第3部）」として、新たな目次で188頁分、346人の令嬢の紹介をする。

資料としての『趣味大観』の概要と、令嬢の趣味「現代代表令嬢総覧」のうち音楽に着目した論考は、周東美材（2011）¹¹が既に明らかにしている。また渡辺裕「趣味・娯楽—民衆文化再編への胎動¹²」は、「西洋における「市民階級」の誕生に伴う「家庭」に関わる一群のイデオロギーの成立の日本版」であると指摘し、『趣味大観』を当時の「「趣味」の世界を最も象徴的な形で示している」と位置づけを示す。

2-2 自然栽培（縮景）趣味の範囲

(1) 「趣味道に関する文献」による趣味の分類

「趣味道に関する文献」は表1のように6編構成となっており、領域名をつけるならば、第1編「音楽」、第2編「美術」、第3編「教養」、第4編「スポーツ」、第5編「栽培飼育」、第6編「蒐集」になる。ここにはそれぞれの趣味の起源や変遷、沿革がまとめられている。流派や会の特性、現状について解説されているものもあり、1935（昭和10）年当時の趣味の分類を知る上で、参考となるものである。

この分類に従い、本論では第5編のうち「盆栽」「盆石」に着目するが、隣接領域である「造園」「園芸」についても考察を進める。飼育を外し、栽培を対象に、これらをまとめて自然栽培（縮景）趣味とした。「花道¹³」は植物を扱うものの、土から切り離されていること、また第3編に収載されていることから、概要を註に付記することのみに留める。

本論で扱う自然栽培（縮景）分野のうち代表的趣味に表記されるのは「盆栽」「盆景」「盆石」「豆盆栽」である¹⁴。また「皐月」「山草」は盆栽の一品種、あるいは下草として合わせて飾るものであるが、「趣味道に関する文献」では、園芸の領域に分類されている。そのため本論では「園芸」分野、「盆栽」

に近接する「造園」「植木」「石の蒐集」「森林写真蒐集」「自然」「野菜栽培」も含めて確認する。

(2) 氏名上部に書かれた趣味の記載について

『趣味大観』『趣味道に関する文献』にまとめられている趣味の分類と、「現代趣味家総覧」の氏名の右肩に書かれる代表的な趣味1～2種類の語句が示

す分類とが合致しない場合がある。1,135名の趣味のうち、第5編「栽培飼育」に分類できると考えられるものを全て抜き出してまとめたものが表2である。自然栽培（縮景）を代表的趣味に1つ以上あげる者は、1,135名中93名、全体の約8.2%¹⁵である。

表1 「趣味の分類」

領 域	分 野
第1編（音楽）	日本音楽、雅楽、声明、能楽、尺八、箏曲、一絃琴・八雲琴・二絃琴、吉備楽、琵琶、義太夫節、河東節、一中節、豊後節の系統と趨勢、常磐津節、新内節、蘭八節・繁太夫節、富本節、清元節、荻江節、説教節、長唄、囃子方、小唄、歌澤節、民謡、演歌、舞踊、西洋音楽、我国に於ける西洋音楽の発達
第2編（美術）	陶磁器、彫刻、鎌倉彫、篆刻、印譜、絵画、書道、仏像、漆器、蒔絵
第3編（教養）	茶道、花道、歌道、俳句、日本文学、日本美術、日本建築、銅器、川柳、漢詩、囲碁、将棋、酒、煙草、演劇、歌舞伎、舞台、映画（無声）、トーキー、社交ダンス、料理、手芸、蓄音器、写真、撞球、麻雀、小型映画、手品、魔術、卓球、西洋舞踊、レコード
第4編（スポーツ）	剣道、刀剣、柔道、弓術、矢、相撲、馬術、競馬、庭球、野球、狩猟、釣、網、登山、ゴルフ、陸上競技、拳闘、レスリング、蹴球、籠球、ホッケー、スキー、スケート、水泳、ヨット、ボート、モーターボート、スカル、自転車、飛行機、自動車、オートバイ、ハイキング、追分節、浪花節
第5編（栽培飼育）	<u>造園</u> 、 <u>盆栽</u> 、 <u>盆石</u> 、 <u>園芸</u> 、犬、猫、狸、猿、蛙、鶏、伝書鳩、鶯、繡眼児（めじろ）、雲雀、鶉、金魚
第6編（蒐集）	古銭、紙幣、藩札、富札、千社札、絲印、印、郵便切手、印紙、色紙、短冊、古鏡、匂玉、矢立、郷土芸術、郷土玩具、仮面、人形、雛人形、※鈴、紙鳶、香道、杯、徳利、暦、煙管、扇子、※鈴、きれち、槍、絵馬、ポスター、番付、商品券、ペン

表は「趣味道に関する文献」の目次に出てくる分野を一覧にした。各編の括弧内の記述、囲み、※は筆者による。
※第6編の「鈴」は実際に2回出てくるが、それぞれ違う内容で沿革が記述されている。

表2 「氏名右肩に記載されている趣味」

	合計人数	分 野（人数）
(a)	39名	園芸 27、蘭 5、菊 2、菊の栽培 1、洋蘭 1、朝顔 1、花卉 1、メロン 1
(b)	24 (※25) 名	※盆栽 15、※皐月 5、盆景 2、盆石 2、豆盆栽 1
(c)	12名	造園 8、庭園 3、庭造 1
(d)	8名	山草 2、高山植物 2、山の植物 1、野外植物 1、鳥類・植物 1、動植物採集 1
(e)	3名	植木 2、植木の研究 1
(f)	2名	石の蒐集 1、化石採集 1
(g)	2名	森林写真蒐集 1、高山植物・植物に関する古書の蒐集 1
(h)	2名	自然 1、自然礼賛 1
(i)	1名	野菜栽培 1
合 計	93 (※94) 名	31 分野

※「現代趣味家総覧」1,135名中93名が自然栽培（縮景）に関する内容を代表的趣味として示している。うち2名は栽培趣味を2種類あげており、「盆栽」「園芸」をあげる者は(b)で「盆栽」で集計した。もう1名は「皐月」「盆栽」をあげているため(b)で括弧内に2つ目を数えた。盆栽趣味は延べ25名、自然栽培（縮景）趣味は延べ94名となる。

3 盆栽趣味家

3-1 盆栽趣味家のプロフィール

本節では「現代趣味家総覧」に掲載される 1,135 名のうち、自然栽培（縮景）趣味を掲げる 93 名（8.2 %）に焦点をあて、掲載情報と具体的な活動例やエピソードなど、複数行にわたる記述を参照し表 3～11 にまとめて資料とし、3-2 では職業、住所、他の

趣味の種類、規模を比較する。本書中の説明が具体的にでないもの、誇大に書かれていると筆者が判断したもの、装飾的な語句などは略した。また掲載される 1,135 名のうち、自然栽培（縮景）趣味を氏名右肩に明記する 93 名以外に、園芸や盆栽を趣味とする者は多い。そのため実際の愛好者比率は 8.2% よりも多い。逆に代表的な趣味としながら具体的記載のない者もいる。

表 3 （a）園芸（蘭、菊、菊の栽培、洋蘭、朝顔、花卉、メロン）分野

（以下、表中では「東京市」は略記した。）

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
1	10	清水 福太郎	能楽家	麴町区	能楽 園芸	詳細の記述なし。	詳細の記述なし。観世流松風会。
2	22	丹治 経三	会社取締役 （監査役）	中野区	能楽 園芸	薔薇、シネダリア ¹⁶ 、 桜草、牡丹（30 余种）、 皐月（40 余种）	詳細の記述なし。
3	26	戸田 康保	子爵	品川区	能楽 園芸	桜草、福寿草、洋蘭	東京帝大理科植物学科卒業、植物学研究のため 欧米各国を游学、昭和 4 年、宮内省内匠寮嘱託 で南洋ジャワにて熱帯植物の研究。昭楽会、愛 蘭会、花卉同好会の各会員。
4	31	高羽 達太郎	能楽家	神奈川県 高座郡	能楽 園芸	苺、メロン、菊、一年 草	学生時代は慶応観世会、観世流鐵仙会、櫻織会 会員。栽培は専門家の域に達する。
5	86	田中 隆吉	会社取締役 （都市開発）	四ッ谷区	園芸 書道	甘 藷（さつまいも）、 大根、樹木、盆栽	武蔵野電鉄沿線練馬村に城南田園住宅組合を結 成し、約 600 坪の土地を利用。
6	110	金井 重雄	弁護士 （その他）	淀橋区	園芸 浮世絵	菊（20 有余年至る）、 秋季の日比谷公園菊花 大会に後援と出品	東京重陽会理事、会報に「菊と日本人」「菊の 歴史」等の発表。
7	160	近藤 三男	挿絵画家	荒川区	園芸 旅行	朝顔（150 鉢）、菊（小 菊）、牡丹（30 余鉢）、 水蓮（10 鉢）	根岸の朝顔の会に入り例年 7～8 月の日比谷公 園の品評会に 10 鉢を出品、数度入賞。牡丹は 5、6 年前より始め、関西、新潟より苗木を取り 寄せている。
8	208	岡野 昇	工学博士、 官僚	王子区	能楽 園芸	菊（7～80 鉢）	令息の皐月栽培に刺激され、菊の栽培を創めて 5、6 年。
9	215	濱崎 定吉	経済界	大阪市 東区	能楽 園芸	詳細の記述なし。	詳細の記述なし。（本書上梓の前に他界）
10	221	花岡 敏夫	法曹界	中野区	運動 園芸	ダリア、盆栽	詳細の記述なし。
11	233	辻 順治	軍楽界	東京府 南多摩郡	音楽 園芸	詳細の記述なし。	詳細の記述なし。
12	238	林邊 賢一郎	実業界	世田谷区	園芸	蘭（100 種余）	温室葡萄園経営、震災を機に現地に住居を建て て蘭の栽培を創める。知人の紹介で、愛蘭会会 員。千葉のガス工場の地熱で温室を作っている。
13	284	下出 義雄	実業界	名古屋市 中区	スポーツ 園芸	林檎、栗	木曾福島に 15 町歩の規模で、林檎園や栗の植 付を行う。

14	290	池田 成功	実業家	神奈川県 大磯町	園芸	メロン、葡萄、胡瓜（60坪）、洋蘭、観葉植物、一般特殊花卉、薔薇、カーネーション、葡萄、ネクタリン、促成花卉、蔬菜など	池田農園を株式組織化し、温室 800 坪と、茅ヶ崎分園（敷地 1 万坪うち温室 1,500 坪）を経営。のち、資本金 20 万円で日本園芸株式会社を設立。英米各国に園芸視察のため巡遊する。
15	294	池田 勇八	彫刻家	滝野川区	愛犬 園芸	果樹、草花作り	神奈川県辻堂にて。
16	378	井村 英次郎	医学博士 （その他）	渋谷区	小鳥 園芸	草花の栽培、灌木、柿、栗、梨等の果樹・庭樹	昭和 3 年から小金井 600 坪の地所において。
17	383	石井 三九郎	旧家 （大地主）	品川区	園芸 旅行	菊、朝顔、茄子、胡瓜、唐梨、落花生、苺、薩摩芋	庭の一隅と、千葉県船橋町の所有地にて。
18	385	西本 辰之助	法曹界 （法学博士）	品川区	園芸 読書	ダリア、テナリウム、菊、朝顔、皐月（1,000 余鉢）、万年青（数 100 鉢）	皐月は 17、8 年前、万年青は 5 年来。
19	423	尾形 次郎	工学博士	麻布区	囲碁 園芸	菊造り、一年洋草の栽培	湘南鎌倉の別荘にて。
20	424	水野 智彦	会社取締役	名古屋市 中区	ゴルフ 園芸	カーネーション、薔薇	昭和 3 年より温室栽培。
21	432	福井 松雄	理学博士	神奈川県 鎌倉町	園芸 野球	野菜、果実の栽培	1,000 坪の庭園で成果をあげている。肥料を研究し「促肥素」を発明。
22	442	土岐 章	子爵	渋谷区	スポーツ 園芸	詳細の記述なし。	東京帝大理科、千葉高等園芸学校を卒業。
23	478	熊谷 孝章	経営者	滝野川区	園芸 ゴルフ	薔薇、草花、果実、メロン、チューリップ	帝国薔薇協会の会員。自宅の空地 8 坪で、草花、果実の栽培、温室もある。ブラザーガーデンの田中氏の手による 24 株のメロンを栽培し、全て収穫できた。
24	505	中田 喜八郎	木材輸入商	京橋区	犬 園芸	朝顔栽培	霊岸町内の展覧会に朝顔「翁の友」を出品。
25	510	三好 三也	製皮事業	世田谷区	能楽 園芸	薔薇の栽培鑑賞	高価なものは余り好まず、専ら強い木のもの。
26	517	野口 秀	政治家	品川区	園芸 小唄	詳細の記述なし。	埼玉県高野村に農園「北秀園」を経営、のち大井町農園を委託経営。大正 9 年から欧米を巡遊、帰国後大日本園芸組合を設立、会長を 8 年、現在は相談役。日本ダリア協会、趣味の生物会副会長、愛蘭会会員、高級園芸市場理事、洋菊の会、マスクメロン協会副会長。
27	642	高橋 門兵衛	資産家	渋谷区	篆刻 園芸	庭園作り、紅葉、朝顔	「入谷の朝顔」へ未明時に車で出かけ、鑑賞しては、その都度購入する。
28	217	小川 百章	工業薬品塗 料商	淀橋区	蘭 大弓	菊、東洋蘭	蘭恵同心会会員。
29	339	福原 信義	実業界	品川区	蘭 ゴルフ	万年青、ゼネコール・ダリア、蘭（7～800 鉢）	18、9 歳の頃は万年青、24、5 歳頃にゼネコール・ダリア。藤山雷太の後援を得て 10 万円の資本金で多摩川にフロリスト株式会社を設立、重役になるが、のちに閉鎖。資生堂花部を設け、石山顯作の指導を受け主任となるが 1 年で閉鎖。

							三越花部の加藤の教えで、蘭の栽培。蘭の大家、柴田常吉から7～800鉢を譲り受け、伏見宮家の蘭係大竹の指導を受ける。愛蘭会会員。前年まで日本ダリヤ会専任幹事。
30	496	加賀千代子	主婦	京都府乙訓郡	蘭ゴルフ	洋蘭(数万株)、蘭(千数百種)	洋蘭の栽培は伏見宮家は別として、民間では最高権威と名高い。横浜植木会社の洋蘭を求め、夫と愛玩するうちに、研究するようになった。全国から同好者の参観が絶えない。門戸を開放し、研究者へ便宜を与える。
31	546	宮原英次	家元	浅草区	生花蘭	盆栽、東洋蘭	無聲流生花盛花投入の家元。
32	574	朝倉文夫	彫塑家	下谷区	蘭釣魚	東洋蘭(100余鉢)	梅の絵を得意とするが、蘭の絵を描くために5,6鉢を買い込み、写生をしている間に興味を覚え、百余鉢を一度に買い込んで鑑賞した。
33	153	坂本佐太郎	薬剤大佐(海軍省)	世田谷区	菊尺八	菊(160～300)	菊の栽培は大正11年より始め3年目から200鉢、多い季は300鉢、最近では160鉢を造る。東京の会には出品せず、苗は清興園、槇麓園のもの。千秋会会員。
34	183	芳川寛治	伯爵、政治家	麻布区	菊投網	菊	秋香会会長(父も明治20年頃に会長)。会の発展と普及に専念。
35	254	幸田延子	ピアニスト	麴町区	菊の栽培釣魚	詳細の記述なし。	兄は幸田露伴。
36	127	前田友助	医学博士	麴町区	銃狢洋蘭	洋蘭(150鉢)	はじめて5年目。伏見宮家奉仕の大竹について技能の修習。
37	261	山田三郎	海軍軍人	品川区	朝顔囲碁	朝顔(呉時代約1,000鉢→現在約100鉢)	少年時代は菊・種の手伝い。日露戦争の際、旅順で咲かせたのが朝顔の始まりで、競技会にも出品し、大輪、変わりものを栽培した。
38	42	大久保作次郎	洋画家	淀橋区	花卉	薔薇(30余種)、水蓮	園芸は画の参考のため始めた。現在もその目的に変わりはないが漸次その栽培にも熱中し、目下は温室にて薔薇30余種を栽培。文部省美術展覧会第10回「庭の木陰」、大正12年槐樹社同人「庭」等
39	446	林川喜代士	経営者	神奈川県鎌倉郡	メロン犬	マスクメロン	松田農園を経て大船農園を主宰し、メロンの栽培をする。春秋二季の競技会で入賞。マスクメロン協会の会員。

表4 (b) 盆栽(皐月、盆石、山草、豆盆栽、盆景)分野

番号	頁	氏名	職・爵位	住所	趣味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
40	50	金成満	経営者	小石川区	皐月盆栽	菊(100鉢)、皐月(70種)	幼年時代より草花が好きで、現在は皐月の競技会に数度入賞。約70種を所持、逸品数種がある。菊も毎年約100鉢を栽培し大日本皐月同好会会員。
41	129	飯田勘一	官僚、法律家	日本橋区	盆栽骨董	皐月、蝦夷松、黒松、真柏、樺	大日本皐月同好会理事、帝国皐月同好会理事、震災前より始め、競技会出品、入賞10回の記録。

42	191	佐藤省吾	彫刻	本郷区	盆栽 写真	植木, 盆栽, 蘭 (数 10 鉢)	庭にあまり高価ではない樹木を植え, 盆栽の含蓄を有し, 蘭を集める。
43	258	櫻井與助	経営者	横浜市中区	らんちゅう 盆栽	詳細の記述なし。	詳細の記述なし。
44	268	頼母木桂吉	政治家	浅草区	盆栽 南画	蝦夷松 (1 万鉢余), 五葉松 (5~600 鉢), 錦松 (500 鉢位), 仏手柑 (600 鉢余), 真柏 (6~70 鉢), 紅葉 (70 鉢)	盆栽趣味は故大隈侯爵の影響で, 幾鉢か譲り受けるうち, 侯爵の亡くなる 5 年前には 200 余鉢を所有。千島方面の蝦夷松他多数所有, 焼き物の蒐集も 1,200~1,300 点, 盆栽の鉢が不足するので, 窯を設け, 自ら鉢を焼く。
45	301	鈴木源蔵	鈴木楼当主	横浜市中区	盆栽 能楽	櫻, 五葉松など, 二百数十鉢, 他に十数鉢の逸品	盆栽は 6 年前より始め, 松柏より雑木を好む。翠香園藤崎萬吉及び明昇園篠崎藤太郎の指導により, 最初から高価なものを買った。内田正一と横浜盆栽会を創立, 副会長になる。
46	366	内田正一	地主	横浜市中区	盆栽 弓道	盆栽 40 鉢	横浜盆栽会会長 (5 年前に創立), 大正 10 年頃に始め 15 年, 昭和 4 年 5 月 15 日に 9 鉢を神奈川県便殿御座所に供え, 神奈川県知事池田宏より感謝状。
47	402	井上篤太郎	事業家	渋谷区	刀剣 盆栽	庭には, 松柏の類, 雑木, 草物, 盆石。展覧会に出品する野梅, 内裏梅, 錦松, 真柏	書は山陽, 南画を好む。「私の盆栽などはホンの手慰み程度で, 先年故伊東巳代治伯が, この四季櫻を是非にと所望され, その代りに僕の庭の盆栽中, 君の気に入ったものをどれでも一品差上げると申されたが, イザとなると永年手塩にかけたものは中々手離されないものだ」
48	440	澤田牛麿	官界	品川区	盆栽 絵画	盆栽 4, 50 種類	盆栽について一書を著すべく日を送る。強い木作りに努める。大隈侯の宅に出入りする源さんと呼ぶ植木屋から紅葉を買い入れ, 14, 5 年手入れをしている。「盆栽は天分と努力が一致するに非ざれば大成するものではない」
49	458	吉田秀彌	会社役員	小石川区	盆栽 書道	松柏を好み, 所有は多数	盆栽は数十年来, 多忙のため専門的に親しむ機会に恵まれない。書は頼山陽を愛す。
50	519	橋本圭三郎	官界, 実業界	淀橋区	園芸 盆栽	園芸, 盆栽, 草花・花木, 蘭, 古木の鉢物	温室や設備は好まないのので, 自然的な栽培方法を採用している。
51	522	小島康利	育英事業	大森区	尺八 盆栽	百楠, 霸王樹, 羊齒, 皐月などを 2,000 余鉢	置き場所に困る状態で, その一部を校庭に栽植する。
52	543	安藤俊三	実業界	名古屋市中区	盆栽 新 画の蒐集	詳細の記述なし。	激務の余暇に始めて 10 年, 自分で育てている。
53	553	小泉又次郎	政治家	淀橋区	小鳥 盆栽	詳細の記述なし。	素人の域を脱して素晴らしき手腕。
54	608	阿部舜吾	銀行員	大森区	らんちゅう 盆栽	園芸, 盆栽, 植木 (山つつじ)	趣味界の俊材。
55	25	松浪菊子	東都女流皐月観賞家	小石川区	皐月 能楽	ダリア, 皐月	東京よりダリアを取り寄せ, 北海道で栽培, 第一人者となる。その後皐月に転じ帝国皐月好友会正会員。毎年上野公園にて開催される会合で何度も賞を受ける。昭和 8 年 6 月同会主催による全国皐月品評会に出品した「松波」は一等賞をとる。

56	101	鯉沼 源作	政治家	京橋区	皐月 骨董	皐月	20 余年前より皐月の栽培を行う。昭和 3 年、帝国皐月好会友への改名を提案、展覧会では優秀賞、最高名誉賞の常連。大日本同好会、東京市共同主催の全国皐月盆栽大会（日比谷公園）及び帝国好会友、東京市共同主催の全国皐月盆栽大会（上野公園）等で特別優等金盃を受領。普及に努めている。
57	187	福島 豊次郎	不明	麴町区	皐月 将棋	盆栽、皐月（変化性に富んだ 7, 8 種の花）、数種類の混合盆栽（数百鉢）	躑躅より皐月を好む。銘木、銘花をつくりだし、特別優等、優等賞を 7, 8 回とる。大日本皐月同好会会長、無審査で優遇、研究に余念がない。大正 3～6 年外遊。
58	399	藤屋 藤七	写真台紙商	本所区	皐月	皐月（花から始まり古木を好む）	帝国皐月好会友幹事及び名誉会員。水天宮参詣の折、銘木松浪を買ったことに始まり、第一人者となった。昭和 8 年 6 月の帝国皐月好会友及び東京市主催で、銘木旭鶴は最高名誉賞を獲得、同時出品の新種銘木華宝は特別優秀賞を受ける。本会と毎回の花期大会には逸品を寄贈している。
59	444	古屋 正平	製造業	神田区	燐票 盆景	盆景	盆景松政流師範、号は八泰庵湘恒。日比谷公園で開催の日本盆景協会主催の品評会には賞状を受けることを常とする。
60	675	伊澤 勝麿呂	財団理事長	小石川区	盆景 ダンス	盆景、大菊花づくり、菊、園芸、薔薇、草花	神泉流盆景の修得、号は天明。日比谷公園陳列会に「義士の討入」を出品。大菊づくりは日比谷公園の陳列競技会に出品を欠かさない。日本画の号は勝泉。
61	149	鼓 さと子	不明	台北市 大平町	盆石 長唄	園芸、花卉、菊、蘭、万年青、盆画、盆石、盆景	盆石は昭和 5 年頃より、細川流の盆画を始め桐村梅花師に師事。盆景は梅友会会員、号は梅里。立正大師 600 年忌の際は結城素明画伯筆の絵を主題に盆画と盆石とを出品した。
62	248	山尾 西子	不明	牛込区	盆石 押絵	盆石、園芸	6 年前に関西地方で見て、勝野博園、嗣子晴夫に就いて修業、号を宣石として細川流盆石三曜会幹事。四調会、精華会会員。
63	409	松平 頼壽	伯爵	豊島区	能楽 豆盆栽	豆盆栽の蒐集、100 余年を経た古木や珍しいもの 300 余種	豆盆栽の蒐集に多年を傾け、珍しいものを多数所蔵、趣味人としての貫禄を示す。

表 5 (c) 造園（庭園、庭造）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
64	14	澤野 順三郎	長唄、有名 会創設者	兵庫県 武庫郡	長唄 造園	阪急沿線賣布に構えた 堂々たる邸宅	日本全国の名勝を型取って、奈良・宮島・近江八景等の風物を庭園に巧みに移植する。
65	48	鈴木 紋次郎	実業界、 工業界	芝区	建築 造園	日本趣味、茶道の影響	高商時代に川合玉堂画伯宅に寄留、鑑賞眼を養成する。現今の時代性と共に移行する建築・造園の様式に不快感。
66	181	北 吟吉	大学教員、 雑誌主幹	杉並区	釣魚 造園	自宅の庭園	四十歳の頃自宅を新築してから趣味を持ち始め、自宅の庭園を設計する。
67	195	大越 政虎	海軍、 会社員	大森区	大衆文学 造園	具体的な記述はなし。	グレイ卿の言葉「いかなる趣味にも遂には飽きが来る。ひとり造園にはそれがない、自然は無限だからである」と引用。

68	567	熊岡 美彦	洋画家	豊島区	仏像 造園	造園研究	地下室に造園の研究室を設ける。
69	598	長谷川 利隆	真鍮業	芝区	造園 自動車	真柏，松，蝦夷松を多数所持	造園に対する趣味は趣味中の代表，盆栽の知識も経験も広く深い，転居により蒐集が困難に。
70	620	山崎 清	実業界	大森区	義太夫 造園	築庭，自然に立脚	築庭を好み，10 年間に亘り一木一石を吟味して配置した。流派には拘らず，自然に立脚して完成させた。
71	636	田村 剛	林学博士	麻布区	造園 洋画	茶道に通じることから，理論に精通。経験も豊富。造園関連書の蒐集。	東京帝大林学部卒，大学院に学び，千葉高等園芸学校，東京帝大農学部，工学部講師。国立公園委員会委員，国立公園協会常務理事，日本庭園協会理事。学生時代は日曜日に山野を跋扈した。
72	62	小川 清次郎	建築業	世田谷区	能楽 庭園	自然樹木に愛着	純日本趣味の造園，建築家として造園に通ずる。
73	456	辻 次作	洋装品の製造販売	荒川区	競馬 庭園	店舗にある庭園	広くはないが，一木一石を配置した名園を成す。
74	470	菅原 恒寛	鉄道界	淀橋区	庭園 散策	3,000 坪の庭園。別荘に樹木，池，奇石，噴水など。日本趣味。	庭園を鑑賞し，造園にもあたって，余生は造園三昧に過ごす。庭園学を研鑽し，数十年これを趣味としてきた。邸宅の庭園は一木一石の配置にも苦心して造り，鎌倉山高砂にも 2,400 坪の別荘を所有。毎日 5, 6 回この庭園を散策する。
75	81	小林 萬吾	洋画家	赤坂区	能楽 庭造	植木の手入れ	庭造りの趣味は京都の御所に於いて，橘の苗を拝領したことが動機となった。植木の手入れは自らの手で行う。

表 6 (d) 山草（高山植物，山の植物，野外植物，鳥類・植物，動植物採集）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品 種・数	経緯・所属会・規模・備考
76	362	岡田 利兵衛	蔵元（銀行取締役他）	兵庫県 川辺郡	小鳥 山草	高山植物 1 万種類	詳細の記述なし。画像あり。
77	436	鈴木 久三郎	金箔店	麻布区	山草 小鳥	子どもの頃は朝顔，草花。今は山草の寄せ植え（培養 20 年以上が 10 数鉢）	山草の寄せ植え培養を 25 年。農夫を 2 人雇って山草を採集する。20 年以上培養の寄せ植えも 10 数鉢ある。御大典記念の紅葉館の盆栽・寄せ植え品評会には多数出品。日本山草会幹事，東京山草会会員。
78	341	津田 正厚	鐵商	兵庫県 兵庫郡	高山植物 茶道	高山植物 500 余种，外国種 100 余种	茶道の修業から茶花によって高山植物に対する趣味を誘発し，培養する。神戸山草会，大阪山草会会員。
79	426	細川 壽一郎	東京農産商 会蒲田農場	本郷区	高山植物 写真	高山植物の採集・栽培，写真撮影，栽培は石楠花を始め数百種	農大林科卒，高山植物研究家。栽培し，撮影をする。中学時代から始め，平地では日常観察，山岳で採取する。高山植物に関する内外の書籍も蒐集。
80	665	邊見 金三郎	記述なし	杉並区	高山 野外植物	山野の草木，高山植物，野草，草花，蔬菜，いけ花における植物	いけ花の展覧会に批評をして花道界でエポックとなった。高山植物の培養研究が趣味，夏季に山へ行き，生育状態を確かめる。九州山脈，中国山脈，大和，鈴鹿連峰，北海道，千島列島まで，写真は 500 数十葉を超える。6, 7 歳から植物を愛好，父が盆栽趣味のため，9 歳の頃には逸品

							を仕立てる。大正13年まで香港に8年滞在、住居の周辺に数十種の野草を栽え、現在に至る。
81	661	前田 たつ子	静山流盛花 投入家元	中野区	山の植物 飼鳥	生花，高山植物	一月から一月半山で過ごし，高尾山，奥多摩，秩父連峰，アルプス，飛騨，穂高，等を踏破。
82	356	徳永 秀三	会社経営	大阪市 東淀川区	鳥類・植 物 乗馬	梨・林檎・桃・金柑・ 橙など，実のなる植木	豊能郡秦野村の山腹に，1500坪余，数百種。 数千羽の鳥の飼育，空き地に植木。
83	150	伊藤 隼	成城中学博 物学教諭	中野区	動植物採 集 絵葉書蒐 集	絵葉書 35,000 葉，研究 書数種，動植物の採集	教諭 15 年，武蔵野で動植物の研究，著書に「趣味の動物界」「動物三百六十五日」「性理三百六十五日」「警遺人間生活」等。澤柳校長より趣味の先生として招聘される。16 歳から山登りを始め，日本の名山には殆ど登山。岸田先生と台湾の新高山，阿里山に登る準備中。東京山草会，趣味の生物の会。

表 7 (e) 植木（植木の研究）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
84	151	橋本 直一	製帽業，政 治家	淀橋区	尺八 植木	植木，盆栽，菊づくり	青年時代から興味があり，現在まで続く。自宅 の 600 坪以上の植木の手入れを自ら鋏を取って 行う。
85	668	駒嶺 定七	染織業	世田谷区	釣魚 植木	珍木の愛育・愛玩	明治神宮外苑にある「なんじゃもんじゃ」を樹 実から 20 余年育てる。
86	222	汐見 儀兵衛	化粧品商	日本橋区	書 画 植 木の研究	詳細の記述なし。	22, 3 歳の頃から植木の研究，種子及び草花の 研究。

表 8 (f) 石の蒐集（化石採集）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
87	85	熊崎 健一郎	易学	大森区	狂歌 石の蒐集	具体的な記述はなし。	永久に変化せず，人力の及ばざる自然のままの 姿なるにおいて専ら愛好している特殊趣味。
88	306	山田 醇	建築	渋谷区	化石採集 刀剣	化石，岩石，古生物学	明治 30 年頃より 45 年まで，化石，岩石の採集， 古生物学の研究を行った。各時代の地層がある 秩父盆地生まれのため関心を示すようになった。

表 9 (g) 森林写真蒐集（高山植物・植物に関する古書の蒐集）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
89	230	河田 杰（まさ る）	官僚	目黒区	森林写真 蒐集	学術的な写真（植物の 天然の状態，森林等の 撮影）	東京帝大農科林学科を卒業，官界，営林局に入 り，大正 8, 9 年頃より写真を始め，森林写真 を趣味とする。
90	449	村野 時哉	実業界	名古屋市 西区	高山植物・ 植物に関 する古書 の蒐集	植物園芸に関する古書 （たばこに関する古書 の紹介），高山植物， 高嶺女郎花	函館に勤務していた時，前田曙山の園芸文庫を 参考に研修し，同好者と文通をして研究，函館 近郊の植物から，駒ヶ岳，蝦夷富士の植物採取 を行った。明治 38 年に名古屋へ越し，培養を 研究。大阪山草倶楽部会員，京都園芸倶楽部会 員，名古屋博物館会員。

表 10 (h) 自然（自然礼賛）分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
91	97	高島 平三郎	教育界	本郷区	自然 和歌	具体的な記述はなし。	具体的な記述はなし。
92	60	清水 釘吉	建築界	神田区	自然礼賛	旅行、明媚なる風光や 大自然の観賞	偉大なる大自然に対し、特殊の愛着を感じこれを賞賛する。

表 11 (i) 野菜栽培分野

番号	頁	氏 名	職・爵位	住 所	趣 味	品種・数	経緯・所属会・規模・備考
93	246	橋本 宇一	学界	神奈川県 鎌倉町	スキー 野菜栽培	トマト、アスパラガス、 セロリ等	昭和6年に渋谷から鎌倉に移住、450坪の敷地（うち80坪は畑）で栽培。

表 12 「自然盆栽（縮景）趣味家の職業」

	職 業	人 数	比 率
各実業界	実業界・実業家 11, 建築界 2, 官界・官僚 4, 教育界・学会 4, 法曹界（弁護士）3, 経済界 1, 軍楽界 1, 鉄道界 1	27 名	29.0%
会 社	経営者 5, 会社取締役 3, 役員 1, 銀行員 1	10 名	10.8%
商 業	木材輸入商 1, 工業薬品塗料商 1, 写真台紙商 1, 鐵商 1, 化粧品商 1, 鈴木楼当主 1, 蔵元 1, 金箔店 1, 東京農産商会（蒲田農場）1	9 名	9.7%
芸術家	彫刻家・彫塑家 3, 洋画家 3, 挿絵画家 1, ピアニスト 1, 建築 1	9 名	9.7%
製造業	洋装品の製造販売 1, 製帽業（政治家）1, 染織業 1, 真鍮業 1, 建築業 1, 製造業 1, 製皮事業（政治家）1	7 名	7.5%
博 士	工学博士（官僚）1, 工学博士 1, 理学博士 1, 林学博士 1, 医学博士 2, 薬剤大佐 1	7 名	7.5%
伝統芸能	能楽家 2, 家元 3	5 名	5.4%
貴 族	子爵 2, 伯爵 1, 伯爵（政治家）1	4 名	4.3%
不 明	不明・記述なし 4	4 名	4.3%
資産家	旧家（大地主）1, 資産家 1, 地主 1	3 名	3.2%
政治家	政治家 3	3 名	3.2%
軍 人	海軍軍人 2	2 名	2.1%
その他	財団理事長 1, 易学 1, 東都皐月観賞家 1	3 名	3.2%
合 計		93 名	100%

3-2 自然栽培（縮景）趣味家の分類

(1) 職業

『趣味大観』『現代趣味家総覧』の自然栽培（縮景）趣味家 93 名の職業を分類すると表 12 の比率になる。明治期には政治家の愛好者が多かったが、昭和初期には、各実業界・会社経営者・商業・製造業を行うものが多い。『趣味大観』の販売層と考えることもできるが、需要層が政治家から実業界に広がっているとみることもできる。次に、芸術家・研究者・政治家・伝統芸能家・貴族・資産家と続いている。

(2) 住所

1932（昭和 7）年、東京市 15 区は隣接する 5 郡 82 村を合併して 35 区となり、1935（昭和 10）年当時も同様である。東京市内は旧来の中心地域、新しく居住者の増えた地域に自然栽培（縮景）愛好者の居住がみられる。東京府以外は神奈川・愛知・大阪・京都・兵庫と何れも中心地であり、外地の居住者もいた（表 13）。比率にして東京市内 73 名で 78.5%，東京市外 1 名 1.1%，東京府内合計 79.6%，東京府以外関東圏が 8.6%，関東圏外が 11.8%である。

表 13 「自然栽培（縮景）趣味家の住所」

東京市	数	東京市	数	東京市外ほか	数
麹町区（千代田区）	4	品川区（品川区）	7	東京府南多摩郡	1
神田区（千代田区）	2	荏原区（品川区）	0	横浜市中区	3
日本橋区（中央区）	2	目黒区（目黒区）	1	神奈川県鎌倉町	2
京橋区（中央区）	2	大森区（大田区）	5	神奈川県鎌倉郡	1
芝区（港区）	2	蒲田区（大田区）	0	神奈川県大磯町	1
麻布区（港区）	4	世田谷区（世田谷区）	5	神奈川県高座郡	1
赤坂区（港区）	1	渋谷区（渋谷区）	5	名古屋市中区	3
四谷区（新宿区）	1	中野区（中野区）	4	名古屋市西区	1
牛込区（新宿区）	1	杉並区（杉並区）	2	大阪市東区	1
淀橋区（新宿区）	7	豊島区（豊島区）	2	大阪市東淀川区	1
小石川区（文京区）	4	滝野川区（北区）	2	京都府乙訓郡	1
本郷区（文京区）	3	王子区（北区）	1	兵庫県兵庫郡	1
下谷区（台東区）	1	荒川区（荒川区）	2	兵庫県武庫郡	1
浅草区（台東区）	2	板橋区（板橋区）	0	兵庫県川辺郡	1
本所区（墨田区）	1	板橋区（練馬区）	0	台北市大平町	1
向島区（墨田区）	0	足立区（足立区）	0		
深川区（江東区）	0	葛飾区（葛飾区）	0		
城東区（江東区）	0	江戸川区（江戸川区）	0	合 計	93

※括弧内は現在の区名。板橋区は 1947（昭和 22）年、練馬区と板橋区に分離している。

表 14 「自然栽培（縮景）趣味家の 2 つ目の趣味」

分 類	分 野	人 数	比 率
第 1 編（音楽）	能楽 12, 尺八 3, 長唄 2, 音楽 1, 小唄 1, 義太夫 1	20 名	21.5%
第 2 編（美術）	南画 1, 絵画 1, 押絵 1, 仏像 1, 洋画 1, 篆刻 1, 浮世絵 1	7 名	7.5%
第 3 編（教養）	写真 2, 旅行 2, 囲碁 2, 骨董 2, 書道 2, 生花 1, 茶道 1, 建築 1, 狂歌 1, 和歌 1, 大衆文学 1, 読書 1, 将棋 1	18 名	19.4%
第 4 編 （スポーツ）	ゴルフ 4, 釣魚 4, 刀剣 2, スポーツ 2, 運動 1, 野球 1, ダンス 1, スキー 1, 大弓 1, 弓道 1, 投網 1, 銃猟 1, 自動車 1, 散策 1, 競馬 1, 乗馬 1	24 名	25.8%
第 5 編 （栽培飼育）	2 つ目の趣味が盆栽 2, 小鳥 3, 犬 2, らんちゅう 2, 飼鳥 1, 鳥 1, 愛犬 1	12 名	12.9%
第 6 編（蒐集）	新画の蒐集 1, 絵葉書蒐集 1, 燐票 1, 書画 1	4 名	4.3%
その他	2 つ目の趣味の記述なし 8	8 名	8.6%
合 計		93 名	100%

(3) 2 つ目の趣味

「現代趣味家総覧」に書かれた代表的な趣味に自然栽培（縮景）趣味の表記が 1 つ以上あり、2 つ目も自然栽培趣味を選択した者は 2 名、2 つ目の趣味の中で比率の高いものは「音楽」「教養」「スポーツ」であった（表 14）。趣味全体の中で「音楽」「教養」「スポーツ」は多いのか比較はできていないが、

自然栽培趣味と合わせて、小鳥や金魚の飼育を行う者が多くみられた。このことから「栽培飼育」を複数選択した人は多いと考えられる。また南画・旅行・生花・茶道・能楽などの文人趣味や芸道と繋がる趣味の記述は自然栽培（縮景）趣味との関係性の中で、紹介される例が多い。

(4) 栽培の規模

栽培の規模に関しては10,000鉢を超える者が「園芸」「盆栽」「山草」の領域で複数おり、業界全体を牽引する立場だったことを記述から読み取ることができる。鉢数ではなく保有する品種数や、栽培面積、栽培場所の表記で示す場合もあり、統一はされていない。自宅の庭におさまる範囲から、栽培地を新たに求めて移転する場合もあり、それぞれのかかり方が記述に示されている（表15）。

3-3 自然栽培のジャンルごとの特徴的な記述

本節では3-1 盆栽趣味家のプロフィールの一覧に示した趣味家のうち、それぞれに特徴的な記述について考察する。記述の中に趣味を始める経緯、所属する会などの表記がある場合は内容をまとめた。また趣味家の中で自然栽培（縮景）趣味についての発行著書がある場合はその著書を参考に記述の確認を行った。盆栽趣味家に関しては、当時の盆栽史資料による記述との確認を行った。

(a) 園芸（蘭、菊、菊の栽培、洋蘭、朝顔、花卉、メロン）

第5編の自然栽培趣味の中で、選択者が多いのは園芸分野である。「趣味道に関する文献」では、園芸の範囲を「農業の一部門に属し、果樹・蔬菜・花卉等の栽培或いは素人趣味の造園をいふ」としている。また園芸の説明には、沿革の他に「朝顔」「菊」「皐月」「薔薇」「蘭」「サボテン」「櫻草」「萬

年青」「高山植物と山草」の記述があり、「皐月」「高山植物と山草」については、培養管理の具体的方法も加えている。

表3の1～27番までの27名は園芸を代表的趣味とする。28～39番の12名は「蘭」「菊」「菊の栽培」「洋蘭」「朝顔」「花卉」「メロン」であり、園芸の範囲として合わせて数え、合計39名とした。趣味植物の区分には、江戸期に流行のあった桜草・牡丹・福寿草・朝顔・万年青・菊・皐月の栽培も園芸に含めており、園芸概念の広さを確認できる。また輸入された植物で広がりをもせた薔薇・シネダリア・洋蘭・カーネーション・ネクタリン・テラリウム・睡蓮・チューリップなどの品種、観葉植物もある。さらに苺・メロン・葡萄・柿・梨・林檎・栗などの果樹、甘藷・薩摩芋・大根・茄子・胡瓜・落花生などの蔬菜も含まれる。植木は主に庭木（紅葉など）で、家庭菜園も園芸に含まれている。

栽培場所は個人の場合、庭の一部や畑、輸入植物は温室などと規模も様々である。中には趣味の規模から入り、のちに委託経営や株式会社化により、農園や果樹園を事業として大規模に営む者も確認できる。栽培を始めたきっかけは家族の影響、近隣の住人の影響、旅行や海外での体験によるものもあり、購入先には、果樹園や園芸店、江戸以来の花木の販売地域からのもの、あるいは旅先で購入している例も認められる。各園芸種には愛好会が組織され、競

表15 「自然栽培（縮景）趣味の規模」

規 模	(a) 園芸	(b) 盆栽	(c) 造園	(d) 山草	(e) 植木	(f) 石	(g) 森林	(h) 自然	(i) 野菜	人 数	比 率
10,000～鉢（種）	1	1	0	2	0	0	0	0	0	4	4.3%
1,000～鉢（種）	2	1	0	0	0	0	0	0	0	3	3.2%
100～鉢（種）	6	4	0	1	0	0	0	0	0	11	11.8%
10～鉢（種）	3	3	0	0	0	0	0	0	0	6	6.5%
その他（面積）	4	0	0	0	1	0	0	0	1	6	6.5%
その他（場所）	3	0	6	5	0	0	0	0	0	14	15.0%
品種のみ（規模不明）	14	10	3	0	2	1	2	1	0	33	35.5%
具体的な記述なし	6	5	3	0	0	1	0	1	0	16	17.2%
合 計	39 名	24 名	12 名	8 名	3 名	2 名	2 名	2 名	1 名	93 名	100%



写真1 「西洋蘭の手入れをする加賀」

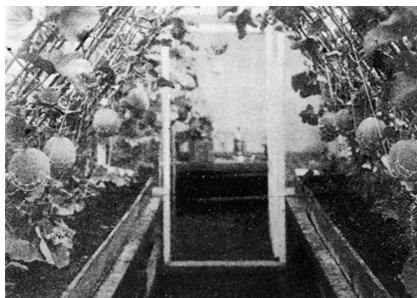


写真2 「熊谷の温室と栽培メロン」

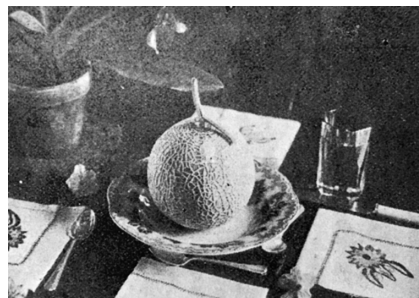


写真3 「林川栽培のメロン」

技会や展示会に取り組む様子を確認できる。本文には、写真の掲載も稀にあり、蘭やメロンの温室栽培の様子は当時珍しかったのか、複数回掲載されている(写真1~3)。

蘭¹⁷は当時一般に東洋蘭のことで、別に洋蘭(西洋蘭)がある。蘭栽培の研究会としては、「愛蘭会」「蘭恵会¹⁸」の名前が見える。伏見宮家¹⁹の蘭係大竹という記述も複数あり、伏見宮家では蘭栽培が有名になっていた。32番朝倉文夫は彫塑家として当時活躍したが、現在は美術館として公開されている自宅(朝倉文夫彫塑館)に、蘭栽培²⁰の温室や鉢、屋上庭園をのこしている。

次に「朝顔」に関しては、1902(明治35)年頃から3度目の流行²¹を迎え、「禮久会」が会員1,000人強、「一六会」「奇舜会」「東京朝顔研究会」などの会が組織された。愛好家の島津家に10,000鉢、野村家に1,500鉢などがあり、入谷には「百草園丸新²²」「鈴木」「横山」など、約10軒の植木屋があった。ブームが去ると業者は明治末年には廃業し、「丸新」は上野公園不忍池湖畔に移転している。昭和

和期の朝顔は明治期の「変化咲」から「大輪咲」に転向する栽培家が増え、全国的に品評会が開かれるようになり、雑誌や研究書の発行が進んだ。

「菊」「菊の栽培」²³に関して、会の名前としては東京「千秋会」と名古屋「秋香会」が記載され、「現代趣味家総覧」では、33番坂本を会員として、34番芳川を会長として紹介している。また6番金井は、「東京重陽会」理事であり、「菊(二十有余年至る)、秋季の日比谷公園菊花大会に後援と出品」とある(写真4, 5)。

(b) 盆栽(皐月、盆石、山草、豆盆栽、盆景)

「盆栽」に関しては、趣味に「盆栽」とあるもの15名、「皐月」5名、「盆景」2名、「盆石」2名、「豆盆栽」1名である。「盆栽」15名のうち、44番頼母木は東京市長、通信大臣を務めた盆栽家で、その栽培数も圧倒的に多い。本文の記載にも蝦夷松(10,000鉢)²⁶、五葉松(5~600鉢)、錦松(500鉢位)、仏手柑(600余鉢)、真柏(6~70鉢)、紅葉(70鉢)とあり、合計すると代表的な6種のみで12,000鉢程度を確認できる。業者の座談会でも豪放磊落な買

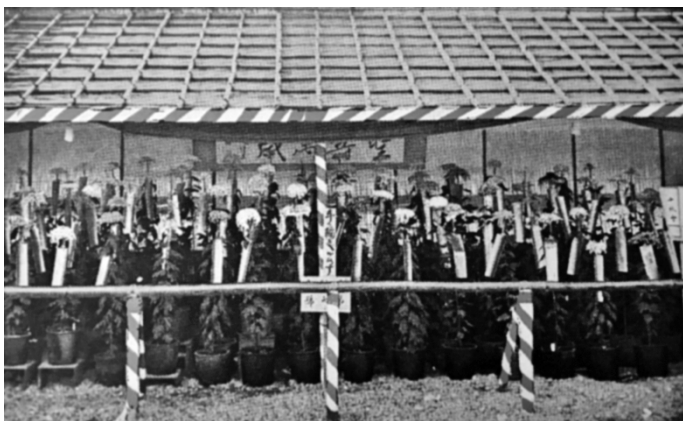


写真4 「御大典奉祝花壇(1928(昭和3)年11月10日)²⁴」



写真5 「千秋会会報 御大典奉祝記念号²⁵」表紙



写真6 「大隈から頼母木への烏泥正方鉢³⁰」



写真7 「頼母木所蔵の蝦夷松³¹」

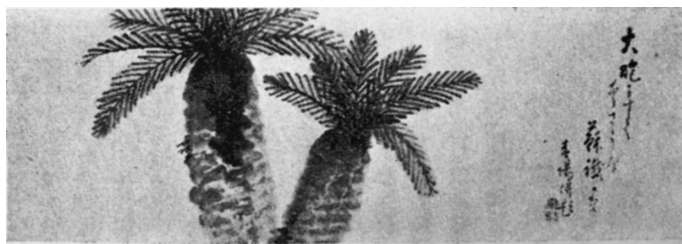


写真8 「頼母木桂吉筆南画」

い方が語り継がれており²⁷，地植えの蝦夷松を一畝まとめて購入，業者の持ち込むものを次々と購入するようになり，蝦夷松盆栽興隆の礎となったことが記録されている。盆栽園を経営する加藤三郎の父（加藤留吉）の話では，国後島の蝦夷松採取業者を介して直接買うこともあり，大小合わせて10,000鉢あるという。この証言は『趣味大観』の記述10,000鉢とも一致する数である。その後，植え替えに必要な鉢を中国から一船ごと買って来たが，さらに数が足りず，自宅に庭窯を築いて鉢²⁸を焼かせるようになったという。庭窯で鉢を造る文化は幕末明治期に大名家旗本等にあった。頼母木の樹種の中に仏手柑600余鉢とあるが，これは大正天皇が好まれた樹種で，たびたび献上していた大隈重信の依頼で頼母木が木を探していたとの話が記載されている。『趣味大観』本文にも頼母木の「盆栽趣味は故大隈侯爵の感化に據るもの」で，幾鉢か譲り受けるうち，「侯爵が逝去される五年前には二百余鉢を所有²⁹」とあるので，盆栽園主の話と，『趣味大観』の記述の一致を確認することができる（写真6, 7）。

45番鈴木，46番内田は共に「横浜盆栽会」の立ち上げメンバーで，内田は会長，鈴木は副会長である。横浜は温暖な気候で木の育ちもよいことから愛好家が多く，特に小品の培養に長けた地域である。「横浜盆栽会」は当時一般的な大型のサイズ³²を扱っていたとみられる。47番井上，48番澤田はそれぞれ，伊東巳代治，大隈重信の影響³³がある。47番井上，49番吉田は，水石界に知られる頼山陽の影響を受けており，同じく書や南画趣味を掲げる者の多くが，頼の山水趣味へ私淑する傾向がみられる。

48番澤田は1927～1929（昭和2～4）年に北海道

庁長官であるが，1934（昭和9）年に『日本趣味芸術叢書 盆栽芸術³⁴』「盆栽原論」を著し，日本趣味芸術に盆栽を美学として扱う試みを示した。扉の写真では「蝦夷松寄植」「蝦夷松」「五葉松石付」「朝鮮山櫻」「皐月銀世界」「水石」各画像を選択し，当時の流行樹種を確認することができる。村田圭司「幕末から明治・大正・昭和にわたる樹種と樹形の変遷史³⁵」では，1933（昭和8）年から1939（昭和14）年に出版された資料を参考に，五葉松・蝦夷松・錦松・真柏・石榴・梅・楓の順で人気があったとまとめている。この点，頼母木や澤田の蝦夷松熱と通じている。

次に53番小泉であるが『趣味大観』での記述は少ないものの，盆栽界では「小もの盆栽」先駆けとして著名な「茶のみ会³⁶」関係者として記録が残る。会は1931（昭和6）年に発足，1933（昭和8）年当時の陳列会には内閣参議の小泉又次郎³⁷，貴族院議員の平沼亮三（のちの横浜市長），東京市長の頼母木も参加したとあり，横浜の盆栽は盛り上がりを見せたという。

51番小島はサボテンやシダ類であり，種類としては珍しく，盆栽にあたるものは皐月である。本文中には「置き場所に困る状態で，その一部を校庭に栽植する³⁸」とある。蘇鉄は，『趣味大観』の頼母木の記述に直筆画（写真8）としても掲載されるが，戦前の国風盆栽展には蘇鉄類を飾ることがあった。現在は盆栽として見かけることが少なくなった樹種である。また54番阿部は園芸・盆栽の記述は詳しくないが，植木は躑躅とある。躑躅は当時，染井の植木屋伊藤伊兵衛の他，大久保方面に入園料をとる躑躅園があり人気であった。「趣味道に関する文献

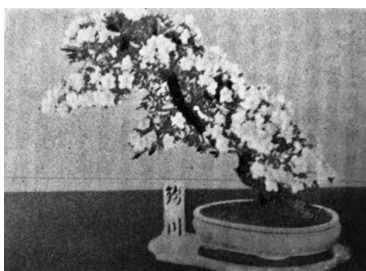


写真9 「金成の入賞の『錦川』」



写真10 「鯉沼の皐月『萬上』」

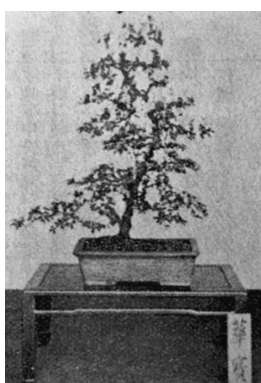


写真11 「藤屋の新種『華宝』」

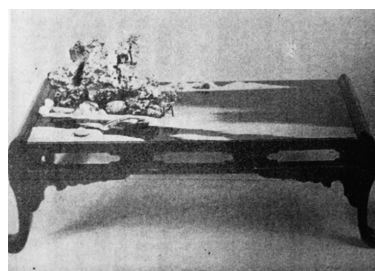


写真12 「鼓の台湾神社奉納の盆石」

目録」には園芸のカテゴリーに皐月があり、「皐月の何物たるや、霧島と皐月との差別さへ一般世人の弁へざりしに、現在に於ては鑑賞花木として随一の人気を博し、全国到る所これを培はざるものはなきまでに普及するに至った³⁹⁾」とその流行が示されている。

40 番金成(写真9)は、大日本皐月同好会会員、41 番飯田は大日本皐月同好会理事、帝国皐月同好会理事とある。いずれも競技会に出品し入選が数回から10回を数え、保有する鉢数や銘品があるとの記述もある。どちらも盆栽趣味を持ちながら、皐月も愛好していることが分かる。また盆栽の表記ではなく、皐月趣味としている者もあり、55 番松浪、56 番鯉沼(写真10)は帝国皐月好会会員、58 番藤屋(写真11)は同会幹事及び名誉会員であり、57 番福島は大日本皐月同好会会長と記されている。『伝承の盆栽銘品撰⁴⁰⁾』の1979(昭和54)年の記録では、もともと「大日本皐月同好会」であったものが分離し、「帝国皐月好会」となったこと、その後、二つの会が合流し「帝国皐月協会」になり、「一般社団法人⁴¹⁾日本皐月協会⁴²⁾」となったとされる。松浪、鯉沼の記述には1933(昭和8)年の上野公園での会合、日比谷公園での大会が示されている。

盆景、盆石については4名の名前があがる。59 番古屋は盆景松政流師範とあり、日比谷公園で開催の日本盆景協会主催の品評会での受賞経験がある。60 番伊澤は神泉流盆景であり、同じく日比谷公園陳列会出品をしている。伊澤の父が校長を務めた東京音楽学校のつながりから日本画の経験もあり、他

にも大菊づくりは日比谷公園の陳列競技会に出品を欠かさないとある。

「趣味道に関する文献目録」には「盆栽」の中に「盆石⁴³⁾」の説明があり、「盆の上に石砂の類にて景色を描き出し室内の幽趣雅致をはかるもの、即ち盆石である。室町時代より生花・茶の湯・香道などと共に盛んとなり遠州流、石川流、相阿弥流、利久流、竹屋流、清原流、細川流、遠山流などの諸流派に分れてゐるが、何れも自然石の形象を玩象する風景より起こつた」とある。61 番鼓(写真12)は、盆石を1930(昭和5)年頃より、細川流の盆画をはじめ、桐村梅花師に師事、盆景は梅友会会員、立正大師六百年忌の際は結城素明の絵を主題に盆景と盆石とを出品したとある。62 番山尾は6年前に関西地方で盆景を見て、勝野博園・嗣子晴夫に就いて修業、三曜会(細川流)幹事とある。

63 番松平は政界で活躍し貴族院議長を務めたこともあり、20を超える公の会長を引き受けていた。酒井忠正⁴⁴⁾によると、そのうち唯一の趣味の会が国風盆栽会であり、自身が愛好者として「豆盆栽」の飾りを行った(写真13, 14)。「豆盆栽」は現在でもその呼び方はあるが、手の上に乗せることのできるサイズの盆栽である。『松平頼壽伝⁴⁵⁾』や『小品盆栽 松平家に生きる珠玉の名品⁴⁶⁾』には当時の栽培したサイズの記録があり、『松平頼壽伝』掲載の新聞記事にも「豆盆栽の宗家⁴⁷⁾」との記載がある。この時期、各地における盆栽陳列会の流行期⁴⁸⁾を迎えていた。松平も東京専門学校出身で、大隈重信の盆栽趣味につながりがあった。また徳川宗敬は「染井



写真 13 「豆盆栽の鉢を整理する松平⁵¹」



写真 14 「前列：石松 ひめくま笹 やぶこうじ，中列：榎 五葉松，後列：杜松 片柏 杉と榎よせ植え⁵²」

五葉松（1923（大正 12）年浅間山麓鬼押出で採集）片柏（昭和のはじめ他より譲り受け）杜松（1932（昭和 7）年頃日内山で採集）杉と榎（1936（昭和 11）年焼岳にのぼり採集）榎（1940（昭和 15）年南京より）

のお庭には、豆盆栽が何百とありましてね。夏、軽井沢に行かれる時は、その中の高級の逸品はお供して転地していました⁴⁹」という。松平は、その後 1934（昭和 9）年から開催の東京府美術館における国風盆栽展開催に朝倉文夫とともに尽力した。酒井忠正は「豆盆栽をお好きで、とうとう私もあの趣味をすすめられてね、国風展といって今も残っておりますが、盆栽の展覧会、その会長をされていた⁵⁰」として、酒井自身も副会長を務めた。

(c) 造園（庭園，庭造）

造園，庭園趣味の記述については，自宅の庭や経営する商店の庭に造園を行った例がある。規模としては 74 番菅原は本邸と別荘に合わせて 5,400 坪の庭園があり，この中で規模が大きい。記述に「日本趣味」を掲げるものが多く，現代的なものは不愉快と示すものもあるので，日本式庭園が評価の前提として共有されている。65 番鈴木紋次郎の記述として興味深いのは，日本画家で山水画を得意とした川合玉堂宅に寄宿していた話や，75 番，洋画家の小林萬吾は自身の趣味として庭造りや植木の手入れをあげている点である。68 番，洋画家の熊岡美彦は造園の研究室を設けたと記載もある。具体的な内容は書かれていないが，洋画家の仕事と造園の関係は影響があるようである。職業として研究している者には 71 番田村がある。

(d) 山草（高山植物，山の植物，野外植物，鳥類・植物，動植物採集）

「高山植物」「山の植物」の趣味で共通するところ

は，茶道や花道の素養があり，山岳への関心も同時に持っていることである。合わせて記録のために写真を趣味としている，あるいは絵葉書や書物を蒐集している場合もあり，栽培と合わせて趣味としていることを確認できる。

83 番伊藤は中学校の博物学教諭であるが，動植物の研究著書がある。この中に武蔵野の植物を研究した『郷土研究 東京の植物を語る』（文啓社書房）があり、『趣味大観』と同じ 1935（昭和 10）年の発行である。伊藤は植物に関しては「東京山草会」に所属し，山草の流行を 1 期と 2 期に分け説明をする。

第 1 期は 1901, 2（明治 34, 5）年頃から 1909, 10（明治 42, 3）年頃までの約 10 年とし，松平康民邸で開いたのが最初の陳列会であり，次に加藤泰秋邸で開いたという。内輪の会であったものを，大会の時は広告も出して大衆に公開するようになった。その中に 1902（明治 35）年 7 月に団子坂の「薫風園」で第 1 回山草会を開いて，新聞の取材も受けた。山草会について西洋の高山植物の真似だと揶揄する品評もあった。「薫風園」は盆栽仕立ての山草を見て，協力するようになり，会場として自園を使わせるようになった。現代の盆栽展示の下草として山野草の類が飾られるが，煎茶飾りとしての盆栽から下草を合わせた飾りに変化する兆しをみることができる。陳列会を開いてから会員も増加し，小集会（持寄会）や座談会を開き過ぐすようになった。この頃「保護植物」の考えも芽生え，その後時勢が進んで採集禁止場所の設定もされるようになった。また名称不明

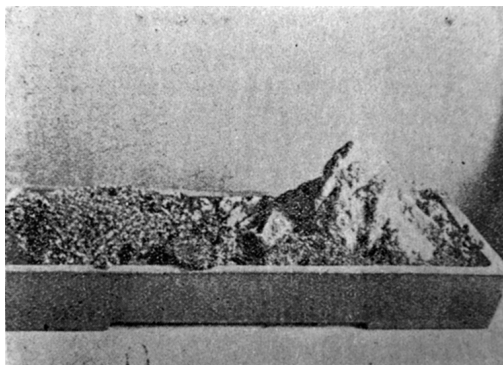


写真 15 「鈴木久三郎の山草の寄植培養」

の植物は牧野富太郎によって鑑定されたという。

第2次山草栽培の勃興は大正から1935（昭和10）年にかけて、「東京山草会」「山草研究会」、雑誌『農業世界』で経営する「植物趣味の会」などが紹介されている（写真15）。伊藤の入る東京山草会は、もともと銀座千疋屋で開催していたものを、浅草の個人宅で毎月1回開会している。

著書の中に、80番邊見は雑誌『山草』を出したとある。北海道から千島にかけて特定の植物を80種以上集めている例や、薬用・医学の研究用に応用する目的もみられる。山草の多くは「春及園」「目黒農園駒澤研究所」「恒春園」「培樹園」「清秀園」「日本山草会（会員組織とは別に個人経営）」で扱われていると報告されている。

(e) 植木（植木の研究）

「植木」「植木の研究」に関しては600坪の庭で植木に合わせて盆栽と菊づくりをする例、明治神宮外苑の「なんじゃもんじゃ」の植木を20年育てる例、種子及び草花の研究と書かれる例もある。

(f) 石の蒐集（化石採集）

「石の蒐集」「化石採集」は2名である。1名は易学に通じ、具体的な記述はないが奇石や水石ではなく自然の石を愛好するとある。趣味の中でも石の蒐集を代表的趣味にあげた人は1名のみで、特殊趣味とある。またもう1名は化石や古代地層に関心があり、古生物学の研究を行ったとある。

(g) 森林写真蒐集（高山植物・植物に関する古書の蒐集）

自然栽培趣味のうち、森林の写真と植物の古書の蒐集に関する趣味をあげていた2名をここにまとめ

た。89番河田は実務家として、取材先の森林の写真撮影を趣味としていることから、仕事との関わりが強い。この時代、写真撮影は趣味としてたびたび登場し、趣味のなかで肯定的に捉えられている。また90番村野は、高山植物については、もともと函館を拠点とし、名古屋に越してから関西の「山草倶楽部」と交流を続けた。また植物に関する古書の蒐集について、本文中では煙草資料として『愛煙草』『俳諧煙草誌』『煙草話』など14冊を紹介し、前田曙山の「園芸文庫」によって研修したとある。

(h) 自然（自然礼賛）

具体的な記述が少なく、分類が難しいが、全体の中で「自然」「自然礼賛」を趣味と示したものは2名であった。92番清水は従軍経験から自然に愛着を感じるようになったとの回想が記されている。

(i) 野菜栽培

野菜栽培の多くは（a）園芸に分類されていたが、1名のみ趣味の欄に野菜栽培とあった。（a）に分類した場合、大規模なものや特別な品種を栽培している様子が見て取れたが（i）の場合、トマト、アスパラガス、セロリであり、園芸の分類にない品種のものであった。80坪の畑という規模である。

4 組織の形成

4-1 ジャンルと組織名

1番～39番の所属組織の括りは、菊・蘭・朝顔については「会」、花卉に関しては「同好会」、薔薇やダリア、マスキメロン等の輸入した新規植物は「協会」、大規模な開発をともなったものは「組合」となっている。蘭の記述に伏見宮家「係」として登場する者も確認できる。また大規模な耕作を伴う農地を「農園」、資本金を集めた「株式会社」組織、会社組織の中に「部」をみることもできる。

40番～63番の盆栽分野については、皐月に「同好会」「好友会」、蘭に「同心会」で仲間の集まりであるのに対し、盆栽には「会」「園」が多くみられる。盆景、盆石については「流」「会」であり、師と弟子の関係を持っている。

64番～75番の造園には「委員会」「協会」の組織がみられ、76番～83番の山草については東京で

表 16 「組織分類の使用単位」

単 位	組織名
会（係）	菊：東京重陽会，千秋会，秋香会 蘭：愛蘭会（4 名），蘭恵同心会，伏見宮家の蘭係大竹（2 名） 盆栽：横浜盆栽会（2 名） 盆景：梅友会 山草：東京山草会（2 名），日本山草会，神戸山草会，大阪山草会 その他：朝顔の会（根岸），趣味の生物会，洋菊の会，昭楽会，四調会，精華会
同好会	大日本皐月同好会（4 名），花卉同好会
好友会	帝国皐月交友会（5 名）
協会	帝国薔薇協会，日本ダリヤ（ア）協会（2 名），マスクメロン協会（2 名） 国立公園協会，日本庭園協会
委員会	国立公園委員会
組合	城南田園住宅組合，大日本園芸組合
倶楽部	大阪山草倶楽部，京都園芸倶楽部
園	菊の苗：清興園，槇麓園
	盆栽：翠香園，明昇園
流派	盆景：松政流，神泉流
	盆石：細川流，三曜会
農園（分園）	池田農園（茅ヶ崎分園），農園北秀園，大井町農園，松田農園，大船農園
博物館	名古屋博物館
会社（部）	日本園芸株式会社，フロリスト株式会社，横浜植木会社，資生堂花部

「会」関西で「倶楽部」の表記がみられ，一部 90 番に「博物館」とあった。その他の分野に特徴的な組織の記述は特になかった。この組織単位からはグループの関係性がよく見え，現在に繋がる組織名である（表 16）。

4-2 日比谷公園の大規模展示

大正時代から昭和初期にかけて日比谷公園は大規模な植物の野外品評会・陳列（競技）会が開催されている。「現代趣味家総覧」にみられる趣味家の記述によると，7 番近藤は根岸に設立された朝顔の会に入り，7 月から 8 月の日比谷公園の品評会に 10 鉢を出品，56 番鯉沼は大日本同好会，東京市共同主催の全国皐月盆栽大会（日比谷公園）及び帝国好友会，東京市共同主催の全国皐月盆栽大会（上野公園）等で特別優等金盃を受領，59 番古屋は日比谷

公園で開催の日本盆景協会主催の品評会には賞状を受けることを常，60 番伊澤は日比谷公園陳列会に「義士の討入」を出品。大菊づくりは日比谷公園の陳列競技会に出品を欠かさない，とある。記載を辿るだけでも，日比谷公園では，1935（昭和 10）年より前に，「朝顔」「皐月」「盆景」「菊」の陳列が行われていることがわかる。その他にも，貸席である「紅葉館」，「伊香保」，同じく公園を活用した上野公園での展示も確認できる。

皐月の品評会・展示会の会場については，3-3 (b) で触れたが，赤羽勝「皐月盆栽の成立と特徴について」（盆栽学会講演記録）によると「皐月盆栽は東京下町の植木業者や露天商が中心となって，関東大震災後の 1924（大正 13）年に浅草の「伝法院」で開催して人気を博し，その後は日比谷公園から上野公園不忍池湖畔で花期展示会を行って⁵³」いたとあ

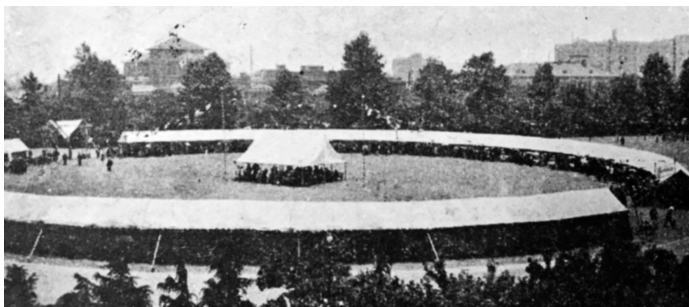


写真 16 「日比谷公園における第1回皐月盆栽大会会場全景
(1926 (大正 15) 年)⁵⁵⁾

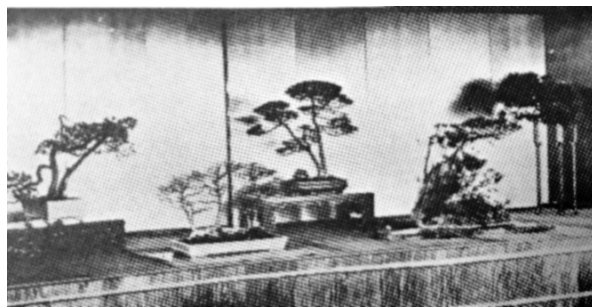


写真 17 「御貸下品 (右より黒松・松石付・檜・桐筏吹・
五葉松)⁵⁶⁾

り、松柏盆栽との流行層の違いについて触れている。

小林 (1931) によれば、「皐月が、展覧会的な陳列を催したのは、大正三年、上野公園に於ける大正博覧会であった⁵⁴⁾」とあり、初めて盆養美花を知った観衆は培養者となり、1921 (大正 10) 年には「大日本盆栽奨会」が鶯谷の「伊香保」で陳列会を開催した。また 1926 (大正 15) 年には日比谷公園で、大規模な盆栽大会が開かれることになった (写真 16)。さらに小石川、その他の公園でも陳列会が開かれ、全国的に品評会も流行した。皐月の創作が進み、この時期、品種のみで 500~1,000 種になるとした。

明治以来、盆栽は煎茶とつながって文人趣味として、新しい飾り方を模索し、個人宅や貸席の床の間にあがることになったが、流行による需要の増加によって、生産者と需要者が急速に拡大した。品評会や陳列会を目的として、大衆に公開するため、貸席ではなく公園における大型の会を開くことになり、その陳列を見た新しい観客がさらに誘引される形で中間層への広がりを見せた。中でも 1922 (大正 11) 年の上野公園で開かれた「平和記念東京博覧会」は、盆栽 400 点が展示され、記録的な入場者があった。そして 1927 (昭和 2) 年の「明治大正記念全国代表名木盆栽展覧会」は一般公開の盆栽展として開かれたものである。1928 (昭和 3) 年には、東京市主催、昭和天皇即位記念の「御大礼奉祝全日本盆栽大会」が開かれ、皇室の盆栽 5 点が貸し出されている (写真 17)。日比谷公園で開かれた初の屋外陳列は人気を博し、約 80 席の規模を維持して「全日本盆栽大会」として第 6 回まで継続した。盆栽を美術として扱う機運が高まり、数年の交渉の結果、1934 (昭和 9) 年東京府美術館において「国風盆栽展⁵⁷⁾」が開

催となり、今日に継続される。

5 昭和初期の自然栽培 (縮景) 趣味の考察

本論は 1935 (昭和 10) 年発行の『趣味大観』『現代趣味家総覧』にみられる自然栽培 (縮景) 趣味の記述、特に盆栽趣味について考察を進めた。

第 1 章では盆栽をめぐる社会状況と再考の必要性、盆栽史の先行研究を示した。第 2 章では『趣味大観』における自然栽培趣味をまとめた。第 3 章では盆栽趣味家の経歴を分類し、特徴的な記述を示した。第 4 章では組織の形成として、分野と組織名、日比谷公園の大規模展示への変化をまとめた。

この時期には「盆栽誌」の需要が増加し、各園の技術者が栽培方法を執筆、名高い盆栽を撮影し、写真集として発売するなど、印刷媒体を通した広がりも併せて確認できる。すなわち、明治期になって大阪で始まった煎茶、床の間飾りの新流行が、東京に入り込み、大正末期の品評会・陳列会を通して、美術館展示へつながる経緯となったことが分かる。大正末期には盆栽芸術論、美術論も広がり「美術盆栽」「自然美盆栽」と言い方も工夫された。この広がりに合わせて、樹形としても、文人趣味から自然主義的な盆栽が評価されるようになっている。

皇族・旧大名・貴族・政治家・大規模な実業家・盆栽園が主導していたものが、『趣味大観』に示されるように、趣味の会の運営、品評会・陳列会・博覧会、人士録、写真の印刷を多用した出版を通して各実業界・会社経営者・商業・製造業・芸術家・研究者・政治家・伝統芸能家・貴族・資産家まで、普及拡大した。愛好者の多かった骨董・盆石・山草は、盆栽の席飾りとしての役目を引き受け、添景・水

石・下草に変化し、合わせて陳列されるようになる。

一方、近接分野である盆景は、大正期までの流行があるものの、家元制を採用したことで需要層の広がりには欠く印象がある。園芸全般に関しては輸入される鑑賞用植物の品種が増え、趣味として育てる肯定的な雰囲気があった。また趣味家の中には、自宅の庭で温室や庭園を築き、規模を拡大させた者もいる。

また、昭和初期は、急速な交通網の発達と国土拡大の肯定的な意識による需要から、蝦夷松・宮様楓・蘇鉄・朝鮮山櫻・南京の榆・採集した山草・高山植物・多種多様な輸入植物の増加など、栽培樹種の産地の著しい広がりを同時期の資料から確認できる。素材を山採り、売り立てが盛況となり、盆栽園が増加したほか、「趣味家」による会が組織され、陳列会で公開されたことで、需要層がさらに拡大した。1923年（大正12）年の関東大震災による盆栽園の被災と移転はあったが、流通網の再整備により、栽培地域も拡大された。

盆栽は陳列の機会が続いたことで大衆向けの陳列形式や、野外に合わせた大型の盆栽の価値が定まっていく。専門業者は暖簾分けをして、特に盆栽園においては「香」「樹」を屋号とする園が増えた。各盆栽園は得意分野を持ち、園を公開し雑誌広告を打って販路を広げ、新しい品種の獲得を進め、趣味者の要望に応えた。趣味家は人士録の記載だけでなく、盆栽美学に関する著作を発行し、陳列会の記録や所有する名品盆栽の記録を盆栽園の企画する印刷発行物に掲載させるようになった。名品を多数所有し、出版物に掲載されることは、昭和初期の文化人・教養人・紳士としてある種のステータスであり、業界を超えてつながりをつくる働きが認められる。

鑑賞者の増大は、東京府美術館を会場とする盆栽展覧会の開催への働きかけを強くした。1887（明治20）年頃に芸術教育に入らなかった文人趣味は価値を一部のこしたまま、一方で大型で重厚な樹形が主流となっていく。自然栽培（縮景）趣味が需要層を形成し、盆栽の樹形も展覧会に合わせた形となった。つまり趣味をきっかけとする「大衆性」は展示運動の下支えとなりながら、盆栽の価値を「東洋的であること」から「国風」に変えることで、美術の領域

に価値を接続させたと考えられる。

註

○本稿中の引用箇所の漢字表記は概ね新字体に改めた

- 1 自然栽培は園芸を含む大きな範囲を示すが、縮景は「盆栽」「日本式庭園」「水石」など、自然を縮小して身近に引き寄せる分野を示す。本論では「石」の鑑賞も含まれるため、自然栽培に入らない範囲として「縮景」と表記した。
- 2 本稿で表記する「趣味家」は『趣味大観』に使用される用語から、比較的規模の大きいもの。また「愛好家」「アマチュア」は、同書記述に多用されている表記で、規模が比較的小さいもののこと。一方で「愛好者」の表記は「趣味家」の現代の言い方として、さらに現代の盆栽用語として一般化している「文人趣味」「南画趣味」はテイストを表す語として、「盆栽趣味」はホビーの意として使用している。
- 3 岩佐亮二「考証盆栽史大綱—社会事象としての盆栽—」『千葉大学園芸学部特別報告』13号 pp. 1-156, 1975, のちに岩佐亮二『盆栽文化史』八坂書房 1976年として出版される。本引用は後者 p. 1
- 4 同上書 p. 1
- 5 同上書 p. 1
- 6 歌川光一『女子のたしなみと日本近代—音楽文化にみる「趣味」の受容—』勁草書房 2019年、はしがき p. iii
- 7 大正期までベストセラーとなる中島信義『盆栽仕立秘法：草木実験』博文館 1902年、木部米吉（苔香園米翁）『盆栽培養法』三銀水石園 1903年、自然主義の影響を受けた無待庵主人（木曾庄七）編『盆栽瓶花 盆栽陳列 聚楽会図録（上下）』1903年、流行を踏まえて盆栽を科学的に示そうとする開原享『樹木盆栽論』1910年などがある。
- 8 皇室の美術工芸資料から盆栽文化と美術の関係を考察した大熊敏之「序説：日本近代美術のなかの書と生花、盆栽」『三の丸尚蔵館年報・紀要』5号 pp. 71-80, 1998, 続編として「序説：日本近代美術のなかの書と生花、盆栽（2）」『三の丸尚蔵館年報・紀要』6号 pp. 82-91, 1999, 「序説 日本近代美術のなかの書と生花、盆栽（3）」『三の丸尚蔵館年報・紀要』7号 pp. 63-72, 2000, 郷土史の観点から江戸の植木屋の実態を明らかにした、平野恵『十九世紀日本の園芸文化—江戸と東京、植木屋の周辺—』思文閣出版 2006年、近代の盆栽の登場人物のエピソードを具体的に網羅した依田徹『盆栽の誕生』大修館書店 2014

- 年などがある。大熊・平野・依田は「さいたま市大宮盆栽美術館」の設立や運営にかかわる。
- 9 周東美材「書物のなかの令嬢『趣味大観』にみる昭和初期東京における音楽」『東京音楽大学研究紀要』35集 pp. 57-78, 2011
 - 10 鶴橋泰二（編）『趣味大観』趣味の人社 1935年「緒言」より引用。
 - 11 前掲、周東（2011）
 - 12 渡辺裕「趣味・娯楽—民衆文化再編成への胎動」鷺田清一（編）『大正＝歴史の踊り場とは何か 現代の起点を探る』講談社 2018年
 - 13 花道は「趣味道に関する文献」によると、插花として、「立華」「生花」「投入」「盛花」に分類され、いずれも花法に従って花形を調べることで、悟ることとされる。盛花は「新興花芸の一種で花器は平型水盤を用いて花卉・草木を盛るように挿した生け方」で、「明治三十年頃にこの花芸が関西地方において行はれ、昭和時代となって猛烈の勢ひを以て全国的に流行を見た」とされる。形式は2種あり、「一は色彩本位の花形」と「景色花」があるが、試作が続いており、貫流する基本花形は無いという。また投入は、花器その他の器に自由に花卉草木を投入して美の極致を表現しようと努めた挿し花すべてとし、明治中期以降生花の傍系として、茶人の茶花となえて明治末期以降家元が続出し、1935（昭和10）年当時には花芸の一部門となったものであるという。趣味家の中には園芸や盆栽、高山植物を合わせて趣味としている者も確認できる。特に高山植物は茶花の繋がりであり、趣味としての近似性がある。
 - 14 度々趣味として登場する「硯の蒐集」は文人の文房四宝につながる要素があるが、第2編「書道」に分類されていることもあり対象から外してある。趣味の記述に盆栽と合わせるものとして能楽各流派、南画が多く登場するが、これも第1編の能楽、第2編の絵画に分類されるものである。第1編は「音楽」、第2編は「美術」領域であるので、表現や鑑賞に関する内容を含むが「花道」同様に本論では触れない。
 - 15 「現代趣味家総覧」の氏名の上に書かれる代表的な趣味1〜2種類を抽出したため、本文中に含まれる自然栽培趣味の記述全ては、ここからは把握できない。実際には、代表的趣味以外に、本文中に盆栽趣味、園芸趣味の記述する例は多い。「全体の8.2%」以外にも趣味とするものが多い。
 - 16 原文中の表記には「ダリヤ」「ダリア」が併用されていたが、本稿ではダリアに統一して表記した。
 - 17 笹山三次『栽培と鑑賞東洋蘭』成美堂 1934年によると、宋の時代から中国、その後日本で続く蘭は全てシンビジウム属（春蘭・建蘭等）であり、西洋で栽培されているものは（シンビジウムもあるが）、シプリペディウム・カトレア・ミルトニア・デンドロビウム等である。東洋蘭は葉の形も花の色や形も清楚で、西洋蘭は花の色彩の強いもの、形の大きく珍しいものが尊ばれるとある。また東洋蘭は、栽培の歴史は長く、文献も豊富で、分類すると春蘭・報歳蘭、大明蘭・金稜蘭・建蘭・寒蘭・寒風蘭・風蘭・石斛があるという。文人の画題としてもシンビジウムに属するものが、文人、南画趣味を通じて積極的に描かれた。
 - 18 83番に掲載される伊藤隼『郷土研究 東京の植物を語る』文啓社書房 1935年 pp. 233-249によると、菊は江戸時代に渡来し複数回の流行期を迎え、明治維新の頃には衰退したが、1889（明治22）年、中菊を主とする「秋香会」が組織され培養趣味の普及、改良に努めた。中菊の栽培から大菊の流行があり、1916、7（大正5、6）年頃に、大菊の「千秋会」「重陽会」、小菊に特化した「長生会」が生まれ、東京に本部、各地方に支部を組織した。その後、大菊を主とした「大日本菊花会」、さらに新進の団体が現れたという。1929（昭和4）年の千秋会事務所発行の『御大典奉祝会報記念号』報告欄には、第11回の会務報告として本年度入会者850名、現在会員数2,300余名とある。
 - 19 伏見宮家は盆栽趣味でも知られる。台湾から持ち帰った楓を『盆栽』誌一般公募により「ミヤサマカエデ」とし、現代でも盆栽界で使用される名称となった。盆栽は一般的な品種名を別称で呼ぶことがある。
 - 20 朝倉文夫『彫塑余滴』朝倉彫塑館 1983年に「一坪園芸の収穫」「蘭を育てる」「洋菊を作る」「植木鉢」等のエピソードを書くなど、植物栽培の実践が多く残る。美術館として住居は公開されている。
 - 21 中村長次郎『朝顔』泰文館 1965年 pp. 25-39によると江戸時代に2回のブーム（文化文政期、嘉永安政期）があった。
 - 22 上野不忍池湖畔にある「百草園丸新」の敷地は昭和初期の経営難により、盆栽組合の拠点である「東京盆栽倶楽部」になり、現在の「上野グリーンクラブ」となっている。仲介は小林憲雄の力添えによる。
 - 23 前掲書、鶴橋（1935）「趣味道に関する文献目録」第5編 p. 7には、「元來園藝上よりする菊の分類は一定してゐないのであるが、凡そこれを大別して大菊・中菊（狂菊）・小菊とし、別に嵯峨菊・伊勢菊・肥後

- 菊・丁字菊・美濃菊・一文字菊・料理菊等を加へる。但しこれ等も強ひて前記三大別の中に含ませ得ないものではないが、便宜上こゝでは別にしてをく。また大菊の細別法も人によつて様々である。例へば東京の千秋會では厚物及び厚走・太管・間管・細管に分け、名古屋の秋香會では一文字・厚物・厚物管走・太管・間管・細管・針管に區分するが要するに大同小異である。その他時期によつて夏菊・秋菊・寒菊とする方法もある」とある。
- 24 深井清徳『会報御大典奉祝記念号』千秋会事務所 1929 年、扉の写真
- 25 同上書、深井（1929）表紙
- 26 蝦夷松を好んだ理由は「樹形に変化があり、葉が細かくて自然の景が出しやすいこと（中略）、培養が非常に楽であること」から盆栽村で入札会を始め、ほとんどその全部を買い取ってしまうほどだったという。
- 27 村田圭司『「盆栽世界」別冊 伝承の盆栽銘品撰 盆栽水石懷古展記念出版』樹石社 1979 年 p. 104 の記録では、九霞園村田久造と蔓青園加藤三郎の話の中で語っている。
- 28 この鉢を生産した庭窯は高明山窯という。
- 29 前掲書、鶴橋（1935）p. 268
- 30 前掲書、村田（1979）p. 73
- 31 前掲書 p. 6、蝦夷松は頼母木桂吉が新潟の中野忠太郎に譲った木で 1979（昭和 54）年当時の画像である。この木の入っていた鉢は肅親王が大隈重信に贈り、大隈から頼母木に贈られたもので、中野に譲る際には、鉢だけは断つたと語っている。
- 32 横浜には豆盆栽、小品盆栽の流行が現在も続いているが、横浜サイズの普及に影響があった可能性がある。
- 33 島内柏堂編『大正名人録』黒潮社 1918 年には、当時の盆石家・盆景家・盆栽家・園芸学者・園芸家について名人をあげており、その中に伊東・大隈の名前をみることができる。伊東・大隈は趣味の上ではそれぞれ大正期から昭和初期の盆栽界へ規模と交流の範囲、多くの名品を所有した意味で長期にわたる軌跡を残した。
- 34 澤田牛麿（編）『盆栽芸術』成美堂書店 1934 年は、小林憲雄「盆栽の培養」「盆栽と鉢植との差別」、中鉢美明「水石の話」、高木文「盆栽の歴史」との共著である。従来の盆栽書に多くある名人による技術の紹介を減らし盆栽を美学として示すこと、また水石を掲載することで盆栽の自然美を強く示す意気込みがある。
- 35 前掲書、村田（1979）pp. 112-122
- 36 杉本佐七『趣味の小もの盆栽 百人百樹』光芸出版 1967 年 pp. 164-165
- 37 農耕と園芸編集部『別冊農耕と園芸 水石の心・石の味』『石と語る』1966 年 p. 44 にある息子の小泉純也の回想には「終戦時の東京空襲で三百鉢余りの盆栽も灰燼に帰したが、父親の盆栽道楽には家族は随分悩まされたものである。政治家は朝早く家をでて夜はおそい。遊説や視察で旅行も多い。真夏には日に三回も四回も水をやらねばならぬ。父の不在中は結局家族が盆栽の面倒を見なければならなかった」とあり、自身「若い時から盆栽の手入れや講釈を聞いているうちに門前の小僧になってしまった」と記し、結果的に昭和 41 年当時、全国遊説先で入手した 300 個余りの石を愛蔵すると述べる。
- 38 前掲書、鶴橋（1935）p. 522
- 39 「趣味道に関する文献目録」には園芸のカテゴリーに皐月が入る。
- 40 前掲書、村田（1979）p. 106
- 41 一般社団法人としては「日本盆栽協会」「日本水石協会」「日本皐月協会」「全日本愛石協会」があり、公益社団法人に「全日本小品盆栽協会」がある。また作家で組織された「日本盆栽作家協会」がある。
- 42 一般社団法人日本皐月協会「日本皐月協会について（協会設立の経緯）」によれば、1913（大正 2）年に浅草の趣味者十数人によって「東京躑躅研究会」が結成され、1924（大正 13）年「大日本皐月同好会」となった。1928（昭和 3）年に東京日比谷公園で「御大礼記念全国皐月大会」を開催する。1927（昭和 2）年には別団体「帝国皐月好友会」が結成される。両団体は 1938（昭和 13）年に「帝国皐月協会」として合流。初夏には隅田公園で、秋には深川の清澄庭園で展覧会を開いた。戦後「日本皐月会」として、1949（昭和 24）年に上野の盆栽倶楽部で祝賀大陳列会、日比谷公園広場で花季大陳列品評会を開き、翌年戦後初めての銘鑑を発行する。現在の「一般社団法人日本皐月協会」となる。
- 43 丸島秀夫『日本愛石史』石乃美社 1992 年 pp. 402-408 の指摘によると、盆石界では本来は水盤石といって水と関係のあった飾りを水石としていた。ところが、この水石を盆石のかわりに使い始めた。そして水石は詩情、漢詩文と切り離されて石そのものの鑑賞へ移行した。水石は盆栽と合わせて鑑賞される機会も増え、その時期に愛好家が増加する。水盤に飾るものだけでなく、台を付け、「山形石、神仙仏体、人物、茅舎、動物」と見立てる面白さを評価する

鑑賞が多くなった。水石の流行は盆栽人口の増加と、水石を扱う月刊誌の登場と相関関係にあるという。石の鑑賞から漢詩文（詩情）を外した経緯は日本画の近代化による文人趣味排除、詩書画を分け、画を色彩化・絵画化することで再編した選択と重なる。

本研究は JSPS 科研費 JP19K00139 の助成を受けたものです。

（はやかわ よう 初等教育学科）

- 44 酒井忠正『盆栽』『国風盆栽會々長 松平頼壽伯を追慕す 国風を愛護する精神』叢会 1944 年，日本盆栽協会『昭和の盆栽譜 国風盆栽展五十年の歩み』『昭和の盆栽史』1983 年 p. 233 に再掲。
- 45 松平公益会『松平頼壽伝』1964 年
- 46 日本盆栽協会『小品盆栽 松平家に生きる珠玉の名品』1974 年
- 47 東京日日新聞の記事「華族様には型破りの人物」（松平公益会『松平頼壽伝』1964 年 p. 502）
- 48 松平の創設した本郷学園校歌は 1929（昭和 4）年の坪内逍遙作詞であるが「むかしは植木の名どころ染井，とりわけ紅葉の錦に知らる，今は学園ここに開て，国の柱の苗木を育つ（後略）」とある。この時期，盆栽陳列会の流行期であった。
- 49 松平公益会『松平頼壽伝』1964 年 p. 395，徳川宗敬の語り。
- 50 同上書，松平公益会（1964）p. 396，酒井忠正の語り。
- 51 同上書，松平公益会（1964）p. 397
- 52 同上書，松平公益会（1964）p. 396
- 53 赤羽勝「皐月盆栽の成立と特徴について」（盆栽学会講演記録）『植物化学調節学会研究発表記録集』33(0) pp. 7-8，1998，躑躅の研究者である赤羽の肩書には盆栽学会顧問とある。
- 54 小林憲雄『皐月の研究と培養』博文館 1931 年 pp. 10-13，同時期の出版に『盆栽の研究』『今の盆栽とその培養法』があり，月刊雑誌『盆栽』叢会を主宰した。『皐月の培養と研究』は新装版が，小林是空（小林憲雄）『皐月・さつきの鑑賞と栽培』誠文堂新光社 1961 年として出版されている。
- 55 前掲書，小林（1931）p. 13
- 56 前掲書，日本盆栽協会（1983）p. 209
- 57 開催の経緯と国風盆栽展の歩みについては，前掲書，日本盆栽協会（1983）pp. 201-284 に詳細が記録されている。

付 記

「近代初期日本における美術・文化愛好者の再生産過程—学校外での教習活動に着目して—」

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19K00139.